

私の中の短編集

月舘

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

頭にぼんと浮かんだ言葉から文章をひねり出しています。

長文書くの苦手なので1000文字ギリギリの超短編です。

何も考えないで書いてるので矛盾あるかもです。

サブタイは内容を書く時に思いついたものなので特に意味は無いし内容と深い関連性もないです。

基本1話短編

☆の着いた話は何かの作品からインスピレーションを受けてます。もうほぼ二次創作です。

目次

切り裂きジャンク	1
つまりは同担拒否	4
☆ドキドキしたい	10
ドキドキしたい暗号解読	17
☆ピクルスは必要か否か。それが問題だ。	20
朝の出来事	24

切り裂きジャンク

殺せ。殺せ。殺せ。

ぼうつとする度に頭から流れ込んでくる。

何を殺すのかも、どこで殺すのかも何も無く何物でもない”モノ”がただただ殺せと叫んでいる。

「一体何を殺せばいいんだ……」

そう思いつつ街の雑踏を練り歩いていく。不確かに、けれども力強く。

僕には大切な”モノ”がない。人も。物も。はたまた思い出さえも。何ひとつとして大切にしている”モノ”がない。

そんな僕にただあるのはこのそこそこ健全な肉体と腐りきった精神のみである。

こんな人間に価値はあるものなのか。こんな人間の魂なんてものは死神さえも黄泉の国へは持って行ってくれないのではないか。

そんなふうになら自分に無下に、無体にならながら歩いていくと僕の目の前にはキラキラとした街とは少しズレているような古びた雰囲気のカフェにたどり着いた。

店内を覗いて見ても誰も見えないところからお世辞にも繁盛している店とは言えないようだ。

そんなことも気にせず店内へと続く扉へと手をかける。カランコロンと鈴の音が入店を歓迎してくれているのを気にもとめずカウンター席に座る。

着席したタイミングで店の奥から店長がやつてくる。

「おやおや。君が来るとは珍しいじゃないか。どうしたんだい？」

「珍しいと言っても月イチくらいで来てるじゃないですか。」

「そうは言ってもやはり君が来るのが待ち遠しくてね。君がいない時間が長く感じてしまふのさ。」

この人は何を言っているのだろうか。そう思わざるを得ないが、それもこの人の日常なのであろう。私はそう思いながら聞き流した。

「全く……無視しなくてもいいじゃないか。それで？今日は一体どうしたんだい？」

「特になんでもないですよ？ただ暇だったのでここに來てのんびんだらりとしたかったです。」

本当はこのやるせない気持ちの居所をどうにかしたかったのだが、それを言うのは何故か憚られたから当たり障りのないことを言ってしまった。だが、店長はそんな僕を見て何かを察したらしくあまり深くは聞いてこなかった。

「……今日は、どんなことが起きますかね？」

「きつと、きつと素晴らしい日が広がっていくよ。たとえ今が辛くあろうとも、ね？」

やっぱり店長は欲しい時に欲しい言葉をくれる。たとえ何も殺せなくても。何にも殺されなくても。それでもいいと言ってくれる。君のままでもいいんだよと笑ってくれる。なぜなら……

「なぜなら君は私で、私は君だからね」

店長はそう言つて僕の目をじいっと見つめながらニヤリと笑った。

つまりは同担拒否

”ヤンデレ”

今の世の中、誰もが1度は耳にしたことがあるであろう単語。病んでるとデレデレを足して作られた単語であり、その選ばれた単語からも読み取れるように「病的にデレデレするヒロイン」を指す。では、同じく1度は聞いたことがあるであろう”メンヘラ”とは何が違うのか。

これは一重に向けられている標的であろう。わかりやすく大雑把に言うならば、メンヘラは不特定多数の大人数に向けて。「誰でもいいから私を見て」、「少しでも多くの人に同情されてる自分可愛い」などの自己欲求を満たしたい人を指す言葉である。

一方ヤンデレはただ一人の人を愛したいただけなのである。そこに他の人の入る余地などないほどに。一点の曇りもなく。ただただ自分の愛の赴くままに。

そんなヤンデレにも大まかにふたつのタイプがある。依存型と独占型だ。このふたつの分類でも特に一般大衆に知られているのはかの有名なヤンデレCDを聞いてわかる通り独占型。つまりは話も聞かないし「私の彼(彼女)に手を出したね?はい殺す」的なバイオレンスな思考に陥ってしまっているであろう。それ故にヤンデレというもの

が好きになってしまった人間は異端者扱いされてしまう。

では、見る角度を変えてみよう。ヤンデレとは？そう。先程もあげた通り「病的にデレデレしている」のだ。つまり、その人の中にはただ一人しかいない。超弩級の、筋金入りの一途な人なのだ。

それが分かるのがヤンデレのもうひとつのタイプである「依存型」。こちらは相手に常人では考えられないほどに依存して自分の中で「理想の彼（彼女）」が自分の前から消えてしまったら生きていけない。死ぬしかない。という所まで思考回路が行ってしまうのだ。

そこに”どうする？”なんて疑問符は何一つない。馬鹿な程に一途な人。気が狂うほどに一途な恋。それでいて相手のためなら自分が死ぬことも厭わないほどの行動力。これがヤンデレの真骨頂ではないか。

つまり何が言いたいのかと言うと、ヤンデレとは「真の愛の探求者」なのではないか

「——なにこれ。」

「ん？ヤンデレについて本気出して考えてみた。」

1組の男女が図書館のようなどころで向かい合って座っている。女は何か読み終わったのかなんとも言えない複雑な顔をしながら男に質問を投げつけるが、男は女の表情なの気にせずさも当たり前かのように訳の分からない真実を述べる。

「いや、うん。ヤンデレがすごく好きなのはわかった。わかったんだけど——
アンタはなんで私に読ませたの？」

「ヤンデレの良さをオマエに知ってもらうため。オレの好きなものを共有したくつて
や。」

「——。」

女は帰ってきた質問の答えに絶句している。わけも分からない文章を見せられて、その理由がわけも分からないし女には全く興味もわかない趣味の共有だったのである。

「……。」ビリビリッ

「ああっ！俺の愛と努力の結晶があああ!!」

この怪文書を読んで何を思ったのか女は読んでいた紙をビリビリに引き裂いた。引き裂いたあとの顔は心做しかスツキリしたようにも見える。そんな女とは引き換えに、男は四つん這いになり、落ち込んだ様子を見せながら破かれた紙を拾っていく。

「全く……そんな変なもの書いてる暇があったらデートプランのひとつでも考えなさいよ。いつつも私だけが考えてるじゃない。」

「うぐっ」

男は女の口から漏れたそんな一言に言葉を詰まらせる。どうやらいつも女に任せているらしい。そんな様子を見た女はここぞとばかりに男に攻める。

「全く……こんなよく分からないこと考えてないで私との幸……せをか、考えなさい」

言ってる途中で恥ずかしくなったのか途中で言い淀んでしまったりしたが、ここで黙ってしまわずに言い切る。すると、男はその一言を聞いて何を思ったのかニヤニヤし始める。

「な、何よ。急にニヤニヤして。気持ち悪いわね。」

「いやあ？オマエは本当に可愛いなって思ってたな？」

「うっさい！」

男は女を茶化し始めると、先程の女優位の空気感はなくなりいつも通りの2人に戻る。すると疑問に思ったのか男は質問をする。

「そーいやーオマエはヤンデレについて何一つ強く否定しなかったけどどうしてだ？」

「え？何が言いたいのか？」

女は聞かれている内容が本当によくわかってないようで聞き返す。すると男は

「いやな？あの紙見せてから今まで文章を書いた時間の無駄さを言われても、ヤンデレなんてただのサイコパスだーってよく言われるような批判？がなかったじゃん。」

「あーそうだったかしら？なんにも考えてなかったわ……」

「あ、何も考えてなかったの……。まあ何が言われると思つてたらなんにも言われなかったもんで正直意外に思つてさ。」

なんてことを神妙な面持ちで語る男。すると女は淡々とそのことについて語り始める。

「別にヤンデレについて何も思つてないわけじゃないけど、でもそれはアンタの趣味趣向で私がおいそれと口出ししていい事じゃないからね。」

「ほーう？随分と寛容なことだ。ま、こちらとしてはありがたんだけどさ。」

「それにアンタが前からヤンデレが好きだつて知つてたしね。今更別に驚かないわよ。」

「……は？今まで行つたこと無かつたよな？なんで知つてたんだ……？」

どういう訳か女が知っていたことに対して疑問を抱く。一番わかりやすい理由だと男との共通の友達に聞いたとかだろ。しかし、この時の男の頭の中には「なんで知っているのか」ということしかなかった。

「なんでつて……そりゃあ秘密よ。大切な情報網だもの。教えるわけがないわ。それに、いい女には秘密は付き物よ？」

にこり、と微笑みながら女はそう返す。男は女に対して懐疑的になるが、そんなはずはないと頭を振る。

「もうこの話はいいじゃない。それより行きたいお店があるの。付き合ってくれる？」

「あ、ああ……行こうか……。」

「もう！引きずり過ぎ！ほら！行くよ！」

「あ、ちよつと！引つ張るなって！わかった！行くから！自分で歩くから！」

「ふふふ！」

そう言つて笑う女の目の奥には、常人では計り知れないほどにドス黒い闇が潜んでいた。果たして男は女の愛を受け止めきれれるのだろうか——。

☆ドキドキしたい

4 4 O J 4 4 K t 4 4 O J 4 4 K t 5 p a H 6 I q 4 6 Y O o 4 4 G 4 4 G 4 4 G T 4 4 G d 7 7 y B

B 5 W M 4 4 G 4 4 K M 4 4 G n 4 4 G v 5 p a H 6 I q 4 6 Y O o 4 4 W 7 7 y B 7 7 y 5 4 4 G d 4 4 K M 4 4 G n 4 4 G v 5 p a H 6 I q 4 6 Y O o 4 4 G u 5 L i W 5

4 4 G T 4 4 K M 4 4 G L 4 4 K J 4 4 K 7 4 4 K v 4 4 K 3 4 4 O n 4 4 O z 7 7 y R 5 L i A 6 Y O o 6 K i Y 5 o a 2 4 4 G u 5 r a I 5 Y 6 7 4 4 K S 6 Z a L 5 a e L 4 4 G X 4 4 G + 4 4 G Z 4 4 C C

「んあ〜……んえっ？(ハハハハ)？」

俺の目の前に広がるのは見知らぬ天井。どうやらどこかの部屋の一室らしい。

何が起きたのか上手く把握できない頭が事態の重さをようやく理解したのか、思考が活発になる。

何とかして昨夜のことを思い出そうとするも、頭の中に靄がかかったかのように上手く思い出せない。

「俺の名前は……。」

5 L i A 6 Y O o 6 K i Y 5 o a 2 4 4 G u 5 r a I 5 Y 6 7 4 4 K S 5 a 6 M 5
 L q G 4 4 G X 4 4 G + 4 4 G X 4 4 G f 4 4 C C
 5 7 a a 4 4 G E 4 4 G m 4 4 K 7 4 4 K v 4 4 K 3 4 4 O n 4 4 O z 7 7 y S
 5 L i A 6 Y O o 6 K i Y 5 o a 2 4 4 G u 5 p S 5 5 6 u E 4 4 K S 6 K G M 4
 4 G E 4 4 G + 4 4 G Z 4 4 C C

「なんでだ……？なんで自分の名前さえも思い出せないんだ……？」

そうこうしているうちに目覚まし時計が役目を果たす。どうやらこの部屋の持ち主

なんてあれこれ考えては有り得ないと一蹴しているうちに、パソコンはいつも通りのプロセスを経ていつも通りに起動していく。そして、起動音とともにパスワード入力画面まで到達した。

起動音を聞いて、したい事するべき事を思い出した。今は無駄に思考を動かしている暇はないとパソコンに向き合い、パスワードを考える。……なんて事はせずに部屋を物色し始める。

「何か……何かないか……。パスワードの手がかりになるようなものは……。」

小一時間ほど探してみたがこれといってパスワードの手がかりとなるようなものは見当たらなかった。

見つかったものといえばテレビにテレビゲームと少し埃の被ったそのソフトが10数本。それにあまり見られていないであろう漫画とアニメのDVDケースがそこそこ。あとは衣服くらいだろう。

つまり、仮称「コイツ」はあまりものを多く持たないタイプの人間で、基本家ではパソコンで何かをして過ごしているやつということがわかった。

結局パスワードの手掛かりが何一つ見つからないという現実には直面して、軽く絶望に苛まれていると急に頭痛がし始めた。

5 L i A 6 Y O o 6 K i Y 5 o a 2 4 4 G u 5 p S 5 5 6 u E 4 4 K S 5 a 6 M 5
 L q G 4 4 G X 4 4 G + 4 4 G X 4 4 G f 4 4 C C
 5 7 a a 4 4 G E 4 4 G m 4 4 K 7 4 4 K v 4 4 K 3 4 4 O n 4 4 O z 7 7 y T
 5 L i W 5 5 W M 4 4 G o 6 a 2 C 4 4 K S 5 7 W Q 4 4 G z 5 L u Y 4 4 G R 4
 4 K L 5 b e l 5 6 i L 4 4 K S 6 K G M 4 4 G E 4 4 G + 4 4 G Z 4 4 C C

「——ッ」

頭の中が書き換えられているような、そんな感覚すら感じてしまうほどの酷く重く長い鈍痛。それでも何故だか痛みに悶える声は出なかった。

10分?30分?それとも1時間?永遠ともとれる痛みの波はゆっくりと、けれども着実に強さを増していた。

しかし、そんな痛みも気づいた時にははた……と止んでいた。

「つたく……一体なんだったんだよ……」

そんなふうには訝しみながら辺りを見回して先程までの自分の行動を思い出す。

「えっと、確か周りの引き出しとか見て……それはパソコンのパスワードが何か調べ

るため……あ！そうだ。パソコンのパスワード……ドが分からないはずんだけど……」

この時、先程まで全くわからなかったパスワードが何故か頭の中にひとつ浮かび上がっていた。

それが正しいかどうかはまだわからないのだが、何故だか胸を張ってそれが絶対正しいと言いきれるほどの謎の自信があった。

とにかくそのパスワードをパソコンに入れて弾かれたらまた考えようと、1時間以上放置して既に自動シャットダウンしているパソコンの電源を再び起動させる。

やはり「コイツ」にしか思えない顔を映していた暗い画面はすぐに光を点し、先程と何も変わらぬパスワード画面を画面に映す。

「とりあえずはつと、これで通ってくればなんら問題はないんだけどな。まあ弾かれたらその時はまた一から考えますか！」

なんて能天気と考えながらもパスワードを打ち込み、Enterキーを押す。すると画面は少しのロードを挟んでデスクトップへと移行をする。

「へ？……マジで……？」

数秒間思考がフリーズする。しかしそんな時間すら今は惜しいと気づき、普段使われているであろうWebブラウザを開き急いで学生証に書いてある校名を打ち込むと、検

索結果一覧の1番上には至って平凡な造りの校舎の写真と大まかな学校の歴史が書かれている。

それを流し見ながら高校のホームページを開くが、パツと見た限りめぼしい情報は載っていないように見える。それでも何かないかと手当り次第に探していくとある人物の名前に行き着く。

「ディベート部部长……モニカ？」

その時、家のチャイムが鳴る。誰か来たのだろうか迂闊に出てしまつて何か問題を起こしたらどうしようか悩んでしまう。そうこう悩んでいるうちに2度目のチャイムが鳴つてしまう。いくらここで過ごした記憶が無いとはいえ来訪者を待たせるのはマズいと言う考えに至り、玄関へと急ぐ。玄関を開けた先で待ち受けていたのは――

「ハロー！5Li75Lq65YWs君！」

「――モニ……カ？」

ドキドキしたい暗号解読

4 4 O J 4 4 K t 4 4 O J 4 4 K t 5 p a H 6 I q 4 6 Y O o 4 4 G 4 4 K I 4
 4 G G 4 4 G T 4 4 G d 7 7 y B

4 4 G d 4 4 K M 4 4 G n 4 4 G v 5 p a H 6 I q 4 6 Y O o 4 4 G u 5 L i W 5
 5 W M 4 4 G 4 4 O s 4 4 O D 4 4 O E 4 4 O A 4 4 K k 4 4 O W 7 7 y B 7 7 y
 B

←

ドキドキ文芸部へようこそ！それでは文芸部の世界へレッツダイブ！！

4 4 G T 4 4 K M 4 4 G L 4 4 K J 4 4 K 7 4 4 K v 4 4 K 3 4 4 O n 4 4 O z 7
 7 y R

5 L i A 6 Y O o 6 K i Y 5 o a 2 4 4 G u 5 r a I 5 Y 6 7 4 4 K S 6 Z a L 5
 a e L 4 4 G X 4 4 G + 4 4 G Z 4 4 C C

←

これからセクション1一部記憶の消去を開始します。

5 L i A 6 Y O o 6 K i Y 5 o a 2 4 4 G u 5 r a I 5 Y 6 7 4 4 K S 5 a 6 M 5

L q G 4 4 G X 4 4 G + 4 4 G X 4 4 G f 4 4 C C

5 7 a a 4 4 G E 4 4 G m 4 4 K 7 4 4 K v 4 4 K 3 4 4 O n 4 4 O z 7 7 y S

5 L i A 6 Y O o 6 K i Y 5 o a 2 4 4 G u 5 p S 5 5 6 u E 4 4 K S 6 K G M 4

4 G E 4 4 G + 4 4 G Z 4 4 C C

←

一部記憶の消去を完了しました。続いてセクション2 一部記憶の改竄を行います。

5 L i A 6 Y O o 6 K i Y 5 o a 2 4 4 G u 5 p S 5 5 6 u E 4 4 K S 5 a 6 M 5

L q G 4 4 G X 4 4 G + 4 4 G X 4 4 G f 4 4 C C

5 7 a a 4 4 G E 4 4 G m 4 4 K 7 4 4 K v 4 4 K 3 4 4 O n 4 4 O z 7 7 y T

5 L i W 5 5 W M 4 4 G o 6 a 2 C 4 4 K S 5 7 W Q 4 4 G z 5 L u Y 4 4 G R 4

4 K L 5 b e l 5 6 i L 4 4 K S 6 K G M 4 4 G E 4 4 G + 4 4 G Z 4 4 C C

←

一部記憶の改竄を完了しました。続いてセクション3 世界と魂を結び付ける工程を

行います。

5 L i 7 5 L q 6 5 Y W s

←

主人公

ということですね。文字数が足りないので本文にてあとがき部分に書こうと思つてたことを書こうかと思いません。

正直私の中ではもつとこの話は早く仕上がっているはずでした。しかもなんか作品名出さないつて全話で言ってるくせに序盤も序盤でDDL Cの名前が出てしまつていたりしてもう暗号部分の記憶が曖昧すぎですね。

まあそんな感じで本当は続きそうなこんな終わりにするつもりはなく、モニカが消した世界を表したかったんですよ。ですけど何故か私の思いどおりにモニカが動いてくれないんです。さすがモニカ。Just Monicaは伊達じゃないですね。

ですが続けるつもりは今のところありません。なんならこの短編だけ別タイトルで上げるまであります。(読者の方から多くの意見が上がったらですが。)

ということ。これからのんびり作品をあげていききたいと思つてますのでよろしく願います。

☆ピクルスは必要か否か。それが問題だ。

ピクルス——それは、酢漬けあるいは自然醗酵によって作られる保存食。主に欧米諸国で好まれ、前菜や肉料理、サンドイッチに添えたり、カレーソースの薬味や、みじん切りにしてマヨネーズに加えタルタルソースにして食欲増進や味に変化をつけるために用いられる。

日本だと、代表的な保存食である梅干しがピクルスの一種だがそれを知る人は意外と少ない。

なぜピクルスの話をしたか。それは——。

「俺の目の前に何故かピクルスと米だけが置いてあるんだよなあ……」

いくら言い争いをしたからと言ってこのご飯は如何なものか、とこの状況を作り出した張本人を弱々しく睨みつける。しかし、彼女は「私なにかしましたか?」と言わんばかりに黙々と素知らぬ顔で味噌汁を飲む。いやなんで俺の分の味噌汁ないん?

「……あの。この食事の格差は何でしょうか……?」

「あら?何か問題でもあったかしら?私はあなたがピクルス大好きだって聞いたから出

したに過ぎないわ。」

……誰が言ったんだそんなこと。俺は言ったことないはずなんだが。というかピクルスなんて好きでも嫌いでもないし。でもこれだけで米は食えねえよなあ……。どうすつかなあ……。

とか思いつつ俺はひと口ピクルスを口へ運ぶ。すると程よい酸っぱさとあとから来るピリリとした黒胡椒の刺激。そこへ野菜の甘さが追い打ちをかけるように美味さを引き立たせてくれる。これは美味しい。

「え？うまつ。こんなうまいピクルス初めて食べたわ。」

「あら？そんなに美味しかった？」

「いやほんとまじでうまいって。何？どこでこのピクルス買ったの？」

そんなことを言いながら白米にがつつく俺を見て彼女は微笑んでいる。お前は俺のオカンか、とか思いながら進む箸を止められないでいる俺を見て嬉しそうに真実を語る。

「自分で作ったのよ。あの子と一緒に。」

「あの子……？あぁ、妹さんね。仲良くなったじゃん。」

ちよつと前まで顔を合わせたら険悪な空気をこれでもかと言うほど周りに振り撒いていた姉妹だったと言われても信じられないくらいにまで仲が修復されていた。良きかな良きかな。

「それもこれもあなたとあの子の周りのバカな人達のおかげよ。」

「そんな事ないさ。君だってあの子だって心の中ではずつと君と仲直りしたかった。その気持ちがこの結果を生み出したんだよ。俺なんて少し手を差し伸べただけ。」

「でも、その差し伸べられた手に私は、私たちはすぐく助けられた。これでも感謝してるのよ？」

「ならおかずを一品だけでも……。」

「ダメ。」

感謝してるのであれば少しくらいいいじゃないか。おかず一品くれるくらい。でもまあ、前より当たりが優しくなったし妹さんと仲良くやってみたいだしいいかな。

「それにしてもよく食べるわね。」

「美味いからさ。つついっついで箸が止まらなくなるんだよ。これまた作ってくれないか？」
「嫌よ。自分で作ればいいじゃない。」

そうやって彼女は俺の目の前の小鉢からピクルスをひとつとって食べる。以前だったら考えられない行動。しかし、今回のピクルスは本人的にも上手く作れたようだ。一口噛んで微笑む。その表情が本当に――

「……………好きだなあ。」

例え何に嘘をついてもこの感情に嘘をつく事はしないようにしよう。それが俺にとってとても辛い道になろうとも……………。

朝の出来事

コツコツと足音を立てながらコンクリートで舗装された道を歩く。現在の時刻はだいたい朝の6時半位だろうか。季節ももう夏に入つて、既に明るく街も少しづつ動き出している。そんな中俺は夜勤が終わり帰宅途中である。

「ただいま……」

そう言いながら家に入る。

帰宅してすぐキッチンへ向かい、一息ついたあと帰ってくる途中で買ったものを持ちながら寝室まで移動して同棲してゐる彼女に一言声をかける。

「……………」

「通販のやつ払ってきたよ」

「ありがとう……」

彼女はまだ頭が覚醒してないのか身体を起こさずどころか顔すらこちらを向けずに空へと生返事を返す。

日によつては起きている日もあるが、今日はどうやら眠気が勝つた日のようだ。正直ちよつとやさつとじゃ起きないだろうし無理やり起こしたところでどうせ機嫌が悪く

なって後でネチネチと言われるだけだ。

そんな俺にも今日は秘密兵器を用意している。

「アイス買ってきたよ」

「ありがと……」

「お前の好きなみかんのアイス買ったよ」

「食べる……」

「あつはつはつはつは！」

彼女はそう言うともまるで既に起きていたかのようにササツと身体を起こす。しかしまだまだ眠いようでまぶたはまだまだしつかりとは空いていない。

その矛盾した動きが何故か俺の中でツボに入ってしまった、現在時刻を考えずに大きな声で笑ってしまった。しかし彼女はそんな俺を気にもとめず俺からアイスの入ったレジ袋を奪い取るとアイスを開けようとする。

「うーん……」

「あつはつはつはつは！」

どうやら寝起きでまだ力がぜんぜん入らないようで、唸りながら袋を開けようとしている。その姿がさっきの俊敏な行動と全く違うものでさらに笑いが込み上げてくる。

「手に力が入らない……開けて……」

「あっはっはっはっはっはっは！」

「うるさい……」

さすがに今の自分では無理だと思ったのか俺にあげてほしいとお願いしてくる姿がまた先程の起きる時の姿と重なって少しだけ治まってきていた笑いの波が再び襲ってきて笑ってしまった。

そうしていると早く食べたいのかふくれ顔でアイスをこちらに突き出しながら怒る。そんな彼女が可愛くて、でもこれ以上機嫌を損ねてもこの後が大変なので笑いを堪えつつもアイスの袋を開けた。

「んふふ。美味しい。」

「それは良かった。じゃあ俺は風呂入って寝るわ。」

「は〜い。おやすみ〜。」

そう言って俺は部屋を出た。眠気を嘔み殺しながら俺はお風呂へと足を進める。

今日は一体どんな日になるんだろうか。願わくは彼女に幸あらんことを。